

変^か半^{わり}身^み

（原案Ⅱ松井周 村田沙耶香）

本作は村田沙耶香と松井周が三年におよぶ取材・創作合宿を経て、
共同で原案を創り、それぞれ小説と舞台として発表するプロジェクト
ト＝inseparableのために書き下ろされた。

I

海で溺れる家畜の絵にしよう、と言い出したのは花蓮^{かれん}だった。

放課後の美術部の部室で、花蓮が足を組みながら言うのを聞いた私と高城くんは、顔を見合わせた。

高城くんが顔をしかめて言った。

「浜尾、真面目に考えろよ。もうあんまり時間がないんだから、そろそろ下描きに取り掛からないと間に合わないぞ」

「そうだよ花蓮、この島に関係がある絵じゃないと怒られるよ。私たちの絵、壁画になって港にずっと飾られるんだから。変なことしたら、島の人にと言われるよ」

「何言われたってかまわないよ」

花蓮は吐き捨てるように言い、美術準備室の椅子にもたれかかった。

港に新しい防波堤ができた記念式典で、島にある学校の生徒が壁画を描いて、それが飾られることになったと顧問の先生から知らされたのは、私たちが中学二年生になったばかりのころだった。私たちの中学校の美術部は五人しかいないが、二チームに分かれて二枚の絵を式典までに提出しなければいけない。楽だと思って入った美術部で、こんな大きな制作物を創る羽目になるなんて、まったくついていないと、私と花蓮は嘆いていたのだった。

高城くんも一年の頃から同じ美術部だけれど、私も花蓮も部活はさぼってばかりなので、事務連絡くらいしか話したことはない。高城くんは二年になってから副部長をしているし、真面目なので、私と花蓮に苛々しているのではないかと、内心はらはらして花蓮と高城くんの顔を見比べた。

高城くんは何を考えているのか、あまり表情の読めない顔で、淡々とスケッチブックを捲っている。

「竹井先輩のチームは海水浴の絵にするらしいな。小学校は子供たちみんなで地引き網の絵を描くみたいだ。俺たちだけふざけた絵を描いたら小学生に笑われるぞ」

「あ、ねえ花蓮、星空とかは？　ここ、夜は星が綺麗だし。黒く塗って点をかけばいいだけだし」

いいアイデアだと思ったのに、花蓮はこちらを見ようとせず、上履きを脱いで、学校指定の白いソックスに包まれた長い脚をゆらゆらと揺らしながら、

「だめ。溺れる家畜の絵にするの」
と言った。

「何で家畜なんだ？　この鳥には、鶏くらいしかないだろ」

「だって、私たちって、家畜じゃない」

窓の外を見ていた花蓮が、大きな瞳をこちらへ向けた。長い睫毛がずっと空気を切り裂いたように見えて言葉に詰まった。花蓮に見つめられると、私はいつもどきりとしてしまう。

高城くんは花蓮の視線の強さに怯まず、淡々と訊ねた。

「どういう意味？　誰に飼われてるわけ？　俺たち」

「だって、この鳥の連中は、皆、家畜を見る目で私たちを見るじゃない。メスはたくさん子供が産めそうな腰をしているか、乳の出はよさそうか、オスは力仕事に使えるか、いい遺伝子を持っていて繁殖力がありそうか、誰と誰が交配したら質のいい

新しい家畜が生まれるか。大人たちってそんなことばかり」

「なんだ、そんな意味か」

高城くんはため息をついた。

「仕方ないだろ。それを言うなら、大人たちだって俺たちと同じ家畜の人生だよ。家畜なりに、鳥を存続させるためにいろいろ考えてるんだよ」

高城くんはいつも冷静で、感情をあらわにすることがない。顔立ちが整っていて、それなのに浮わついていないので、女子から人気がある。でも私は、高城くんは、落ち着いているというより、何かを諦めたようなところがあると、いつも思っている。

仕方がないのかもしれない。この島は、いろいろと村おこしをがんばってはいるけれど、村として存続するのが精一杯で、いきなり大人気の観光スポットになる可能性は極めて低いと大人たちも本当は気がついているような気がする。花蓮みたいに、東京行って研究者になるんだと、大きな夢を見ている女の子は、教室にもあまりいないように感じる。就職先が少ないから一旦島は出ることになるだろうが、さして優秀でもない自分が、東京に出て行ったところで、結局は働いて食べるだけの坦々とした日々が続くだけなのではないかと、私もどこかで思っている。

「そうだ、祭りの絵は？ 他とかぶらないし、描きやすそうじゃない？」

花蓮に呑気な口調で投げかけると、その強い視線が少し柔らかくなり、すいと美しい顎がこちらへ向けられた。

「陸ったら、そんなの描いたらもつと怒られるよ。家畜の絵のほうがまし。祭りの季節はじいさんばあさん連中は特にぴりぴりしてるんだから。写真一枚とっただけで、村八分にされちゃうんだからね」

「わかってるけど、お祭り、島の外の人もたくさん来るし、楽しいから好きなんだもん」

私の言葉に、やれやれというふうに、花蓮が表情を緩めた。

「陸は子供なんだから。陸は島の高校に進学するんでしょ？ 村の人とうまくやっていかないと、肩身の狭い思いをしちゃうんだからね」

本当は私だって、祭りの話は島の外の人にはしてはいけないことくらい知っている。花蓮は昔から、私がこうやって馬鹿で無垢な子供のふりをする、うれしそうに叱って、私を愛でてくれるのだった。

「真面目にやらないと、大崎のおばさんがうるさいぞ。わざわざ歴史館の奥の資料まで出してくれたんだから」

高城くんの言葉に、慌てて頷く。

「そうだよ、千代ばあちゃんも楽しみにしてるって言ってたよ」

花蓮はため息をついた。

「二人とも、どんどんこの千久世島に染まってくみたい」

「染まるも何も、ここが私たちの島じゃない」

だからここで生きていくしかない。続けようとした言葉を、私は俯いて呑みこんだ。

学校を出ると、もう辺りは薄暗くなっていた。

「じゃ、俺あっちだから」

高城くんは山の方を指差し、鞆を背負ってゆっくりと歩いて行った。

「そっか、高城くん、「山のもん」だもんね」

花蓮が呟いた。この島には大きく分けて二つの区域があり、私と花蓮が住む海辺の集落は「海のもん」、山の方にある集落は「山のもん」と呼ばれている。昔は海のもんと山のもんは、別々に暮らしていて仲が悪かったときくけれど、今は私たちは同じ学校に通っていて、そんなことはない。一緒に暮らしているおばあちゃんは「山のもんは血が汚い」などと毒突いているときがあるが、おばあちゃんはあと三十年もすれ

ば老衰で死ぬだろうし、おばあちゃんの世代の老人たちがいなくなったら、そんなことを言う人がいたことも、島の人たちの記憶からなくなっていくのだと思う。

はやくみんな死ねばいいのにな。私は村の大人たちのことを、いつもそう思っている。私たちが一番年上になったら、この島は今とはまったく違っているはずだ。六十年後には嫌でもそうなるだろうけど、今すぐそうなってほしい。

村の老人たちを集めて燃やしたら、この島は私たちのものになるのだろうか。祭りが近くなったせいか、最近、いつもそんなことを考えている。

私の家は路地の奥にある。玄関を入ると夕ごはんの匂いがした。

「ただいまあ」

廊下の奥にある自分の部屋に入り、敷きっぱなしの布団の上に体を投げ出して目を閉じた。

朝から開けっぱなしにしていた窓から潮の匂いがする風が吹き込む。路地に響く誰かの足音の向こうに、かすかに波の音が聞こえる。

私はこの音を聞きながら想像するのが好きだ。

この島には、昔、ポーポー様という神さまがいたという伝説がある。伝説にはポピ原人という種族も出てくる。少しの遺跡と化石があるだけなので、でっちあげたという友達もいるけれど、私はこの不思議な伝説が好きだった。

山の上に住む千代ばあちゃんはよく子供たちに手作りのお菓子をくれるので、みんな千代ばあちゃんの家に集まり、よく昔話を聞かされた。退屈だと言う子も多かったが、私は夜になるといつも千代ばあちゃんの話进行い出しながら眠った。

私は、ポーポー様とポピ原人は宇宙人か未来人なんじゃないかと思っている。宇宙船かタイムマシンに乗ってこの島にやってきているのだ。そして、この島でホモ・サピエンスという下等生物を集めて観察して、実験しているのだ。

海の向こうに本島があるなんていうのも嘘で、この星には海とこの島しかないのだ。ユーラシア大陸も南極大陸も本当は全部嘘で、どこまでいっても海があるだけで、人類は私たちしかないのだ。

私たちにそんな嘘をついているのはポーポー様とポピ原人で、実はここは巨大な研究施設で、私たちはポーポー様に命じられたポピ原人に実験されているのだ。だから私たちは本当に家畜なのだ。繁殖して美味しく育ったら、ポピ原人たちに食べられるのだ。

そうだったらどんなに素敵だろう。子供のころから、いつもそう考えていた。

花蓮にだけはこの妄想をこっそり話したことがある。花蓮は、可愛くてたまらないというふうには私のばかりしい空想話を聞いてくれた。

「陸ったら、中学生にもなつて本当に子供みたいね。でもね、残念だけど、海の方こうにはちゃんとこの大陸があつたわよ。私、子供の頃ヨーロッパを旅行したことがあるもの」

きつとそれが正しいのだろうが、実際にこの目で見ていないうちは、自由に想像ができる。花蓮は早く島を出て自由になりたいと言うが、私は、島の中にいて海の向こうを想像しているほうが自由なような気がしていた。

目を閉じて、ポーポー様とポピ原人のことを思い浮かべる。

空想のなかで、ポーポー様とポピ原人は、今も私たちのことを見つめている。私たちの汚さも、醜さも、興味深く観察してくれている。海の中でただ一つ浮かんでいるこの島で、私たちだけが何も知らずに食べられるために繁殖している。そんなことを思い浮かべながら、いつのまにか、子供のころのようにシーツに抱き付いて、眠りについていた。

祭りが近づいてくると、にわかには島が活気付いてくる。この島にはポーポー祭りという伝統ある祭りがあって、島民みんなが参加する。三日間行なわれるポーポー祭りの最終日の夜には、選ばれた人間しか参加できない秘祭「モドリ」がある。「モドリ」に参加できるのは十四歳になってからで、この学校にも、「モドリ」に初めて参加する子がいるのだと思う。私もその一人だった。

「モドリ」に参加するのが誰なのかは口外禁止になっているのでわからないが、きっとあの子とあの子は行くんだな、と思う子は何人かいる。休み時間にベランダで泣いている子を見たこともある。皆、自分が祭りに参加する年齢になってしまったことに、まだ戸惑っているような様子だった。

祭りの話、とくに「モドリ」の話は学校ではあまりしてはいけないことになっている。それでも、皆の様子がいつもと違うのは明らかだった。

学校にも島にも、いつもとは違う空気が流れ始めているのを肌で感じていた。私と高城くんは、放課後の美術準備室で、大きな模造紙に壁画の下絵を描いていた。

花蓮は今日は風邪をひいたと担任の先生に連絡があり、学校を休んでいる。しばらく学校へは行かないかもしれないと、昨日の夜電話があった。

風邪というのは嘘のようだったが、私は深く追究しなかった。もしかしたら花蓮も「モドリ」に参加するのかもしれない。だとしたら、デリケートになるのもやむを得なかった。

記念式典へ向けた壁画は、結局私が最初に提案した、星空の絵になった。ただ黒く塗ったうえに星を描いただけだと、手抜きだということが丸わかりなので、ポーポー様が星座になって浮かび上がっているという絵にした。夜空に浮かび上がるポーポー様の絵は、高城くんが描いてくれた。真面目に部活に出ているだけあって、高城くんが描いてくれた下描きはとても上手だった。

「すごいね。港にある銅像より、高城くんの絵のほうがうまいみたい」

「あんなの、偽物の銅像だよ。本物のポーポー様の像は、山の奥にある」

高城くんが鉛筆でポーポー様の角を描きながら、こともなげに言った。

「えっ、そんなのこの島にあるの？」

「普段は社の中であって、「山のもん」でも見ることはできないから。俺は小さい頃千代ばあちゃんが教えてくれて、こっそり見たけど、後で父親にめっちゃめっちゃ叱られた」

「いいなあ、見てみたいなあ」

「この島の伝説、信じてるの？」

「うん、半分くらい信じてる。だって、素敵だもん」

「そうかな」

高城くんは小さく笑った。珍しい表情だな、と思って見ていると、高城くんが顔をあげてこちらを見た。

「伊波も、祭りに参加するの？」

「……お祭りは、毎年家族で行くよ。お餅の入った豚汁、食べるのが楽しみなんだ」

「そっちなやない。わかってるだろ。「モドリ」だよ」

高城くんの言葉に、私は声を潜めた。

「高城くん、この話、してるのがばれたら村八分だよ」

「大丈夫だよ。今日は大体の部活は外練だから、校舎にはほとんど誰もいない」

「……出るよ。親に通達がきた。高城くんは？」

「俺も出る」

息を呑んだ。この話を持ちかけられた時点で予想はしていたが、高城くんも「モドリ」に参加するのだと思うと、鉛筆を握った指先が震えた。

その震えを「モドリ」への怯えだと勘違いしたのか、高城くんが囁いた。

「逃げればいいのに。浜尾みたいに、仮病使って」

「……無理だよ。逃げられるわけない。この島のしきたりだもん。仕方ないよ」

「浜尾は、伊波と一緒に逃げようと思うよ。今日、どこにいるのか知ってるんだ」

「家じゃないの？」

「そのうち、伊波にも言うと思うよ。あの人、伊波のこと特別大事にしてるもんな」

「そうかな」

「しつ。足音がする」

言われて耳をすますと、廊下から微かに近づいて来る足音があつた。私たちはさっきまでの会話がなかったかのように、再び絵を描き始めた。

私が模造紙に描いている新しい星座を見て、高城くんが訊ねた。

「それ、なに？」

「ポピ原人。これも島の伝説だから、いいかなって。私、この島のポーポー様とポピ原人の話、好きなんだ」

「へえ」

ポピ原人の髪の毛を黒く塗りつぶしながら、足音と笑い声が遠ざかって行くのを確

認し、私は囁いた。

「……高城くんは、お祭り、逃げないの？」

「逃げられないよ。本当に、俺たちってたぶん、家畜なんだな。浜尾が言ってたみたいに」

高城くんの声が誰もいない準備室に響いた。しんとした準備室の中で、私は呟いた。
「波の音、聞こえないね」

学校は家よりも浜辺から遠くて、ここまでは波の音は聞こえない。高城くんは返事をせずに、黙って鉛筆を動かし続けていた。

祭りが近くなると、参加する家は仮面をつくる。ポーポー祭りに参加するのはおばあちゃんと、両親と私だ。母はこの島に旅行に来て、父と恋をして結婚した余所者なので、ちゃんと準備ができているか、馬宮のおばさんがさりげなく確認しにくる。

「あー、だめだめ、ポーポー様のお供えはもつといい餅じゃないと……ほらほら、仏壇の蠟燭はまつ白じやないとだめ、うちの少し分けてあげるから」

母は「ありがとうございます」とにこにこ礼を言っているが、心底うんざりしてい

るようだった。

馬宮のおばさんが台所にいるのを少しうっとうしく感じながら、私は居間で仮面を作っていた。仮面はすっぽりとかぶる形をしていて、紙でできた土台に、紙粘土を張り付けていく。粘土で三本の角を作って、乾かしたあと、真っ黒な墨で好きな模様をつけていく。「祭り」で何が行なわれるかは、だいたい知っているつもりだ。儀式が終わった後、自分がどうなってしまうのか、少し怖くもあったが、それよりも、高城くんも儀式に参加するということのほうが、私には不安だった。

角を乾かしているところで、スマートフォンが光った。見ると、花蓮からのメッセージだった。

『今、信号にいる。出てくれる？』

この島に信号は一個しかない。本当はその一個もあまり必要なくて、ほとんどの人が信号無視している。そんなものよりもっと祭りに予算を使ってくれと、父がよく愚痴っている。

私は台所の様子を窺った。母はまだ馬宮のおばさんへの対応に追われているようだった。

『すぐ行く』

私は財布と携帯だけポケットに入れて、そと家を抜け出した。

信号に行くと、Tシャツにハーフパンツという部屋着のような格好に黒いカーディガンを羽織っただけの花蓮が立っていた。

花蓮はなんだか痩せたように見えた。前から細かったけれど、今の花蓮からは骨の形が浮かび上がって感じられる。

「どうしたの、花蓮？」

「見せたいものがあるの。誰からもつけられない？」

「へいき。おばあちゃんは部屋に籠ってたし、おかあさんは馬宮のおばさんに捕まっていた。見せたいものって何？」

「ついてきて」

花蓮は早足で海岸沿いの道を歩き始めた。私は黙ってその後について歩き始めた。

花蓮が向かったのは、海岸沿いにあるリゾートホテルの廃墟だった。

すたすたと割れたガラスから中に入っていく花蓮に、慌てて声をかけた。

「ちょっと待って。見せたいものって、この中にあるの？」

「こわい？」

花蓮は立ち止まって振り向き、私の手をとった。

「大丈夫。私を守るから」

花蓮と私は手を繋いで、花蓮のスマートフォンで薄暗い室内を照らし、割れたガラスを用心深く避けながら、奥にある階段をのぼった。

階段を一番上まであがり、廊下を進むと、花蓮が一番奥にあるドアの残骸に向かって声をかけた。

「篠塚さん、浜尾です。入りますね！」

「え、花蓮、ここに人がいるの？」

驚いて訊ねた私を安心させるように、花蓮が繋いでいる手を強く握った。

朽ち果てたドアの向こうからごそりと物音がして、メガネをかけた痩せた男の人が姿を現した。

「こんにちは」

男性は、私に微笑みかけた。私は戸惑って、花蓮の手を離して一歩さがった。

花蓮はそんな私をあやすように背中を撫でた。

「驚かせてごめんね、陸。この人、民俗学の研究者で、大学の先生の篠塚明さん。」

この島の祭りを研究するために、本島から来たの」

「こんな場所で、怪しいものではありませんというのは無理があるかもしれないですが、怖がらないでください。浜尾さんにここを教えてもらい、匿ってもらっているんです。僕は純粹にこの島の伝統と祭りを研究したくて来たんです」

差し出された手と、恐る恐る握手をした。近くで見ると快活そうな、普通の人で、確かに変質者というわけではなさそうだった。

「僕は大学でずっとこの島の研究をしています。いつか、「モドリ」をこの目で見てみたくて。でも秘祭なのでそれは無理だということを、ブログに書いていたんです。それを見た浜尾さんがメールをくれて」

「そう。私が呼び寄せたの。先生に「モドリ」を見せてあげるって」

「花蓮……！」

私は驚いて、繋いでいた花蓮の手を強く握りしめた。

「こんなこと、島の大人たちにばれたら殺されるよ。島の外の人に、「モドリ」を見せるなんて……！」

「いいじゃない。どうせ、このまま祭りに出たって、殺されるようなものなんだから」

花蓮は声を低くして言葉を吐き捨てた。

「私、あんな祭り、大嫌い。どうせなら篠塚さんにぜんぶ記録してもらって、世界中に向けて告発するの。こんな恐ろしい祭りが行なわれてるんですよって。これは私の復讐なの」

花蓮の剣幕に、私は怯えて後ずさった。

「そんなこと……許してくれないよ、島の大人たちに何されるか……」

「陸はいいの？」

花蓮はじつと、怖気付く私の瞳を見つめた。

「知らないの？ 今年の「モドリ」、高城くんなんだよ」

息を呑み込んだまま、それ以上呼吸ができなくなった。

「……まさか、そんなこと……」

貧血を起こしたのか、まだ外から光は入ってきているのに、目の前が薄暗くなっていく。

よろめいた私を支え、花蓮が私の耳元で囁いた。

「知らなかったんだ。知ってたら、陸だって平気な顔でお祭りに出たりできないよね。だって、陸、ずっと高城くんのこと好きだったもんね」

どうしてそれを、と口に出すこともできず、薄暗くなった視界の中を溺れながら、その場にしゃがみこんだ。

「おい、その子、大丈夫？」

遠くから篠塚さんの声が聞こえる。「平気です、この子、貧血持ちなんです」という花蓮の落ち着いた声が響いている。

もう何も見たくなくて、強く目を閉じた。廊下についた人差し指が、冷たいガラスの破片にぶつかり、小さな痛みが指先を走った。

小学校のときからずっと、私の恋と発情は、高城くんのものだった。

誰にも言ったことはなかったのに、花蓮はいつから気がついていたのだろう。用心深く、私のどこからも、この発情の気配が漏れないようにしていたのに。

この島で、私にとって男の子は高城くんだけだった。他の子たちは、クラスメイトの男子であっても、異性ではなかった。私にとって、異性と感じられる存在は、高城くん一人しかいなかった。

この島を出たら魔法はとけるのかもしれない。大好きだった近所のあき姉ちゃんが

この島を出るとき、寂しくて泣いている私の頭を撫でてこう言ったことがある。

「私も寂しいけど、どうしてもこの狭い世界を出ないとだめなの。この島を出て、本当の恋をするの。いつか、陸ちゃんもいつかそうならないとだめよ。いつまでもこの島に閉じ込められていたら、呪われてしまうんだから」

私はこの島の呪いにかかっているだけで、島を出て広い場所へ行ったら、高城くんのことなど忘れてしまうのかもしれない。

でも、今の私には人生でたった一つの恋だった。

恋をしていることがわかったら、この狭い島ではすぐに噂話になってしまう。私は学校ではほとんど高城くんを見つめないように気をつけていたし、必要以上に話さないようにしていた。

それでも、ずっと夢をみていた。十四歳になって「モドリ」に参加しなければいけなくなる前に、高城くんと恋人同士になるという、淡い夢だ。連絡事項以外で話しかける勇気もない私に、そんな奇跡が訪れるわけがないのに。

もしも、万が一、恋人になることができたなら、いつか二人で逃げよう。心の底では、本当はそう願っていた。その願いを、叶うはずがないと身体の中に閉じ込めていた私に、罰が下ったのかもしれない。

ポーポー祭りの三日目の夜、いよいよ秘祭「モドリ」が行なわれる段階になると、宿からはほとんどの観光客が消え、島には島の人間しかいなくなった。

「モドリ」は、島民以外は決して来ることのできない山奥の神社の社の前で行なわれる。祭りの間は、一言も、声をあげてはいけないことになっている。

まずは「狩り」を模した儀式が始まる。黒い着物を着て仮面を被った参加者たちは、大きな焚き火を中心に、火を囲うように円を描いて並ぶ。

仮面を被った皆はたいまつを取り、一人ずつ火をつけていく。全員のたいまつに火が灯ったら、焚き火のまわりをぐるぐると、裸足で踊りながらまわる。

やがて、輪の中央に、鮮やかな黄色の着物を着た、「モドリ」が連れられてきた。

「モドリ」は特別な赤い仮面を被っている。両手を赤い紐で縛られていて、家畜のように司祭に引かれて歩いている。

火の前になると、司祭は「モドリ」を横たえた。「モドリ」はおとなしく、火の前で寝そべった。

司祭がさっと右手を上にあげると、太鼓の音が響いた。一発目の太鼓の音で皆は踊

りをやめて、内側を向いて静止した。

ぼうん、と二発目の太鼓が鳴る。その音と同時に、たいまつ先の先を地面に擦り付けてたいまつを消す。

一斉に火が消えて、焚き火の光だけになった境内に、三発目の太鼓の音が響いた。たいまつを再び両手で、今度は剣をもつような手つきで構える。

どうん、と、一際大きな、四発目の太鼓の音が響いた。

皆が一斉にたいまつを振り上げ、「モドリ」に駆け寄った。

「モドリ」に群がり、獲物に向かっていたたいまつを振り下ろす。皆から殴られても、「モドリ」は呻き声ひとつあげなかった。

太鼓の音が鳴り響いている。この音が止まるまでは、「狩り」の儀式は続く。獲物に見立てた「モドリ」を皆で狩り続けなければならない。

いつまでもたいまつを振り上げない私を不審に思ったのか、横にいる誰かが訝しげに仮面に隠された顔を向ける。仮面の奥で、ぎろりと疑惑の目が光ったような気がした。

私は目を強く閉じて、両手でたいまつを振り上げた。なるべく不審に思われないように、力を込めて振り下ろす。薄く目をあけると、「モドリ」へと私が振り下ろした

たいまつで腕の皮膚が破け、血が流れていた。

思わず後ずさりしそうになったが、私を追い立てるように、どん、と誰かの脚が私のふくらはぎに当たった。

「モドリ」への「狩り」に参加しない人間は、モドリと一緒に生贄になる。私は再びたいまつを振り上げ、「モドリ」へと振り下ろした。

何度たいまつを振り下ろしたかわからない。ぐにやりと柔らかい感触や、骨に当たる硬い感触が、たいまつ越しに腕に響いてくる。

「モドリ」が血だらけになって動かなくなったところで、やっと太鼓の音が終わった。

「狩り」の時間が終わると、次は獲物を捕らえたことを讃える「狩猟祭」へと儀式はすすんでいく。「モドリ」の着物が剥がされ、青白い身体があらわになった。

まわってきた盃に口をつけて酒を飲み、自分たちも着物を脱いでいく。

着物を脱ぎ捨てた私たちは、仮面だけを身につけたまま、全員でまぐわうことになっている。

まぐわう前に、「狩り」で獲った獲物をそれぞれが食べていく。本当に「モドリ」を食べることはできないので、皆で「モドリ」に棒を突っ込むことがそのかわりにな

る。伝説のように、「モドリ」の肛門にたいまつを突き刺すのだ。

「カエレ！」

司祭が歌うように叫んだ。誰も声を出してはいけない中、司祭だけはこのとき声を出していいことになっている。

「カエレ！」

カエレ、というのが、山へ帰れという意味なのか、伝説のように人間の姿に還れということなのか、私にはわからない。司祭の声に合わせて、血だらけの「モドリ」に皆がたいまつを突き刺していく。

私は足の震えがとまらなかった。高城くんは生きているのだろうか。「モドリ」で人が死んだのは昔のことだとおばあちゃんが言っていたけれど、目の前の蹲った高城くんは、人間であることをやめて物体になったように見える。

私の裸の肩を、誰かがひきよせた。獲物の料理がおわって、ヒトたちのまぐわいが始まるのだ。

見回すと、周り中で、まぐわいが始まっていた。声を出してはいけないことになってはいるが、皆の獣のような息遣いが聞こえてくる。

肩に回された手に力がこめられた。私は血だらけの「モドリ」を見つめたまま、ぼ

んやりと身体の力を抜こうとした。

「島の外のもんがいるぞ！」

その時、司祭のものではない、甲高い声が聞こえた。

はっとして声のほうを見ると、篠塚さんが隠れているはずの木の影のほうへ、皆が走り出していた。

黒い影が逃げていく。カメラを持った篠塚さんに違いなかった。その影を皆がたいまつを放り出して追いかけていく。「殺せ！」「殺せ！」という男たちの怒鳴り声が聞こえた。

突然の騒ぎに呆然としていたら、誰かが私の手をとった。

「陸、逃げよう」

「花蓮」

声は花蓮だった。仮面をつけているが、乳房の上に、前に修学旅行で見たことがある小さなホクロがある。

「高城くんが……」

私は血だらけになって横たわったままの高城くんへよろよろと歩み寄った。花蓮が私の手を引っ張る。

「だめだよ、あれは助けられない」

「いやだ、一緒にいく」

私は跪いて高城くんに触れた。息がある。ほっとして、「逃げよう」とその手を掴んだ。

高城くんは私だということがわかっていてのかいないのか、司祭にそうしていたように、おとなしく立ち上がって、首から赤い紐を下げたまま私たちについてきた。

「こっち！」

花蓮に導かれ、私たちは神社を抜け出して山を走り始めた。

前を走る花蓮に言った。

「篠塚さん、大丈夫かな。見つかっちゃうなんて……」

「そんなの、計画通りだよ。だって、最初に叫んだの、私だもの」

わたしはぎょっとして、仮面をつけたまま走る花蓮に叫んだ。

「どうしてそんなこと……!？」

「囹になってもらったの。いいんだよ、あんなやつ、善人面して、安全な場所から私たちの祭りを面白がってるだけなんだ。あいつ、たぶん殺されるよ。私たちはこのどさくさで逃げ切ろう。あっちに服を用意してる」

私には花蓮がわからなくなっていた。私の前を走っているのは、本当に私の幼馴染の花蓮なのだろうか。

高城くんは、血を流しながらも、なんとか私たちについてきていた。

とにかく、この夜を抜け出すんだ。私たちは、それから一言も喋らず、闇の中を裸で走り続けた。